

地域教材を生かし、時代の社会システムの理解を めざした社会科歴史授業

—— 小学校 6 年生における「徳川頼宣ってレジェンド？」の授業を手がかりに ——

A Social Studies History Class Aiming to Understand the Social System of the Era by Making Use of Regional Teaching Materials :

Based on the Lesson of Elementary School Sixth Graders “Is Tokugawa Yorinobu a Legend?”

岩 野 清 美

Kiyomi IWANO

(和歌山大学教育学部)

西 端 幸 信

Yukinobu NISHIBATA

(和歌山大学教育学部非常勤講師)

2017年8月2日受理

要約

時代の社会システムを探る社会科歴史授業の意義はどのようなものか。現代社会とは相対的に異なる社会の探究を通して、社会の認識の仕方を学ぶとともに、過去の社会システムを目的・手段の観点から考察することにより、子ども自身がより望ましいと考える社会的価値を実現するための法や政策といった手段を探りうることであろう。本研究では、時代の社会システムを探る社会科歴史授業の意義を述べるとともに、小学校 6 年生における実際の授業を取り上げ、時代の社会システムを探る社会科歴史授業の具体を示した。

1. 社会科歴史授業の学習内容

社会科で学習されるべき内容は何か。この問いに対して、社会科教育学では、社会システムを教えるべき学習内容として考えることが一般的であった。例えば池野範男は、「事実や事象、概念や理論という要素は、社会の部分を示すにすぎない」ことを指摘し、「不可視のシステム」である社会について「見えない社会の秩序を見えるようにし、取り扱う」ことが社会科授業であると主張している¹⁾。歴史学習についても同様に、原田智仁は、「歴史を長期持続のシステムないし均衡ととらえる」ことで「歴史の重層的把握」が可能になることを説く²⁾。もちろん、社会科の学習内容をこのように規定することには、さまざまな批判もある。1つは、現代社会についての認識という点からの批判である。「社会の液化化」³⁾、「個人化」⁴⁾が指摘される現代社会において、社会機能論に基づく社会システムで社会をとらえることの妥当性という観点からの批判と言える。2つめは、社会認識の方法という観点からの批判である。社会学の内部で社会システム論が批判にさらされ、構成主義的な社会認識が広まるとともに、社会科教育学においても、社会全体を外から見渡す特権的な観察者(視点)は存在しないことを等閑視して社会科授業構成は考えられないことが主張されるようになった。また、その教育的な意義についても、社会をシステムとしてとらえることによって社会が人間の力を超越した自然的・普遍的な力によって管理されている

かのようにとらえさせてしまい⁵⁾、問題に対する自己言及性が弱い学習になりやすい⁶⁾という批判がある。さらに、社会認識の育成のみならず社会参加をも社会科の目標に位置づけるべきだとする立場から、社会について認識させるだけでなく社会構築への参画意識を育てることの重要性が主張されるようになった⁷⁾。これらのうち社会参画については、2016年12月に出された中央教育審議会答申で、社会科の目標である国家及び社会の形成者として必要な資質・能力の1つとして、「社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想する力」⁸⁾が掲げられ、社会科教育研究における大きなトレンドとなっている。

本稿は、このような状況にあっても、市民性育成のための社会科歴史教育の学習内容は時代の社会システムであるべきとの立場に立つ。

人間の約束事(ルール)にもとづいて成り立ち、多様なルールの複合的な重なりが実態の効果として形成されるのが社会である⁹⁾。社会参画を志向し、社会に見られる課題の解決をめざした社会科授業では、課題解決のプロセスのなかでルールを具体化し社会を秩序立てる法や政策などに関する選択・判断(構想)が欠かせない。その際には、法や政策が実際にどのような社会をつくりだしているのかを考察することが必要であろう。しかし、現代社会は複雑化し、また、自分がその内に含まれている社会全体を外から特権的に見渡すことができないことから、そのような社会認識は容易なこと

ではない。その点、過去の社会については、それをいったん自分が生きている現代社会とは相対的に異なるものとしてとらえ、どのようなシステムで、どのようなルールから成り立っていたのか、そのルールはどのような価値観に基づいたものだったのかを分析的にとらえることができる。このことを通して、現代社会についても、その認識の方法を学ばせることができよう。さらに、ある時代におけるシステムがどのような価値の実現をめざしたものであったのか、めざされた価値をよりよく実現しうるものであったのかなど、過去の社会システムを目的・手段の観点から考察することにより、過去の人々がどのように社会を構想してきたのかを通して、子ども自身がより望ましいと考える社会的価値を実現するための法や政策といった手段を探ることになりえよう。このように、社会科歴史授業で過去の社会システムを学習内容とすることで、社会を認識する方法やより良い社会を構想する方法を学ぶことができる。

また、社会参画を志向した社会科授業論は、社会の形成者として社会に見られる課題の解決に向けて構想する力をもった市民の育成をめざすものであるが、社会構築への参加はだれか特定の個人が独力で言うとい

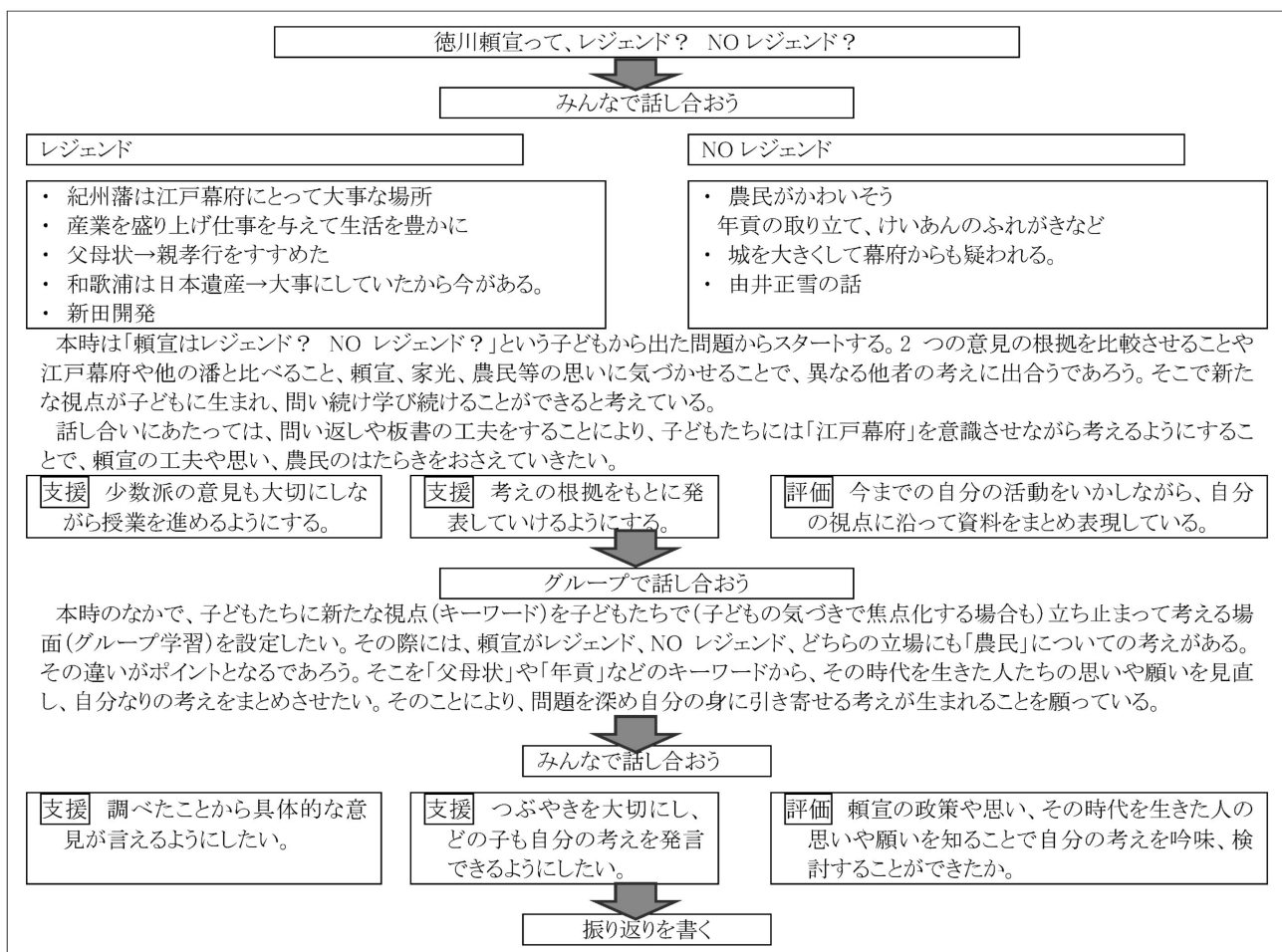
う種類のものではない。社会への参加は、他者とのコミュニケーションを介して実現される¹⁰⁾。相互理解を志向するコミュニケーション的な行為によって作り出される公的な場(これを本稿では「公共圏」と呼ぶ)で活躍する市民の育成をめざした社会科授業は、授業の場そのものが公共圏であることが求められる。そのような空間で子どもたちが自他の社会認識を出しあい、磨き合う社会科授業をめざしていくことが必要であろう。

それでは、このような課題に応えうる、過去の社会システムを学習内容とする社会科歴史授業の具体はどのようなものであるのか、具体的な授業実践を事例に考えたい。

2. 授業の概要

本研究で取り上げる授業は、2017年6月に和歌山大学教育学部附属小学校6年A組(梶本久子教諭)によって行われた、単元「江戸時代」から「徳川頼宣はレジェンド? NOレジェンド?」(6月17日(土)実施。本時9/11+総合)の授業である。①学習指導案と、②教材について、③当日の授業について、板書と授業記録の一部を順に示す。

表1 検討対象事例の本時の展開



【和歌山大学教育学部附属小学校「公開研究会」本時案と資料より筆者作成】

(1)実施授業の学習指導案

実施された授業(本時)の目標は、以下の通りである。

- ・聞き取りや調べたことをもとに、友だちの意見と比較したり関連付けたりしながら、表現することができる。
- ・頼宣や家光の政策や思い、江戸時代を生きた人の思いや願いを知ることによって自分の考えを吟味、検討することができ、プロジェクト型の学習にいかすことができる。

本時展開を表1に示す。なお、単元計画については、別稿¹¹⁾を参照されたい。

(2)教材について

本時は、初代紀州藩主徳川頼宣の政治を取り上げ、それが当時と現在に与えた影響を考えながら、近世の社会システムの生成のようすを明らかにしていく授業である。授業の前半では、頼宣が行った政策のうち、藩主の権威の確立(南龍大神、和歌山城の拡張など)とみかん栽培などの産業の振興が話し合われ、授業の後半では、「父母状」をめぐるグループ活動が行われる。「父母状」とは、頼宣が儒者李梅溪につくらせ、万治3(1660)年に出した触れ書きである。その全文を図1に示す。

この触れ書きは、「常々油断無く下々へ教え申し聞かすべきものなり」とあるように、毎年御免下げの際に、大庄屋から庄屋、肝煎等の村役人に読み聞かせ、村役人は寄合ごとに懈怠なく百姓に読み聞かせることになっていた。その後、享保年間には、父母状が寺子屋の教科書に用いられ、また、宗門改めの際にも奉読し聞かされるようになった¹²⁾。

藩主が出した法令であり、寄合の際に百姓に読み聞かせられ、また、寺子屋の手本にも用いられた「父母状」を教材として取り上げることで、江戸時代の社会システムがどのようなもので、どのようにつくりあげられていったのかを考えることができる教材である。

父母に孝行に、
法度を守、謙、不奢して、
面々の家職を勤、
正直を本とする事、
誰も存たる事なれ共、
愈よく相心得候様、
常々無油断下々へ教へ可申聞者也。
右之通下々に至る迄奉守候事。

図1 父母状の全文

(3)当日の授業について

板書の概要を図2(原稿末尾)に示す。

頼宣がレジェンドかNOレジェンドかを話し合う授業の前半部分では、藩主の権威の確立と産業の振興について、それぞれの政策の目的と影響が話し合われる。後半では父母状に焦点化し、「資料集にある百姓への触れ書きと似ているのか」、「百姓にどのように受け入れられたのか」をめぐる、話し合いが進んでいく。

前半の話し合いでは戦国時代に大名による一円支配が成立しなかった紀州を統治するにあたって頼宣が権威を高める必要があったこと、また、幕藩体制のなかで産業の振興に努める必要があったことなど、頼宣の政策の目的を具体的な事例を通して考えている。話し合いの際には、これまでの学習の経緯をまとめた模造紙やICTを活用しての情報の共有化や、教師による問い返しや板書による情報の整理が行われている。また、後半の父母状に焦点化した場面では、4人1組のグループでロールプレイングを行い、父母状が百姓にどのように受け入れられていったのかを考えている。

板書を見るとわかるように、本授業では城拡張、産業などの政策に対して、レジェンド、NOレジェンドという2つの立場から意見が出される。その際には、価値判断の根拠となる事実が提示され、自分とは異なる意見をもつ友だちが、なぜそう考えるのか、友だちの考えの理解が板書を媒介にすすめられる。レジェンドか否かという二項対立型の問題では、自分とは意見の異なる他者が必ず存在する。その際に、他者の考えをわかりやすく板書で示すことで、教室空間が相互理解を志向するコミュニケーション的な場になるよう支援していると言えよう。

それでは、この授業においては社会システムの探究がどのようになされているのか。本章では授業の前半についてのみ述べ、授業の後半については章を改めて検討したい。

紀州藩初代藩主徳川頼宣の政策を考える前提として、戦国時代の紀州に統一的な権力がなく、多くの在地権力があったことがある。頼宣はこのような紀州をまとめるために、東照宮を造ったり、和歌山城を拡張したりして、目に見える藩主の権威を高めるとともに、産業を振興し、藩を豊かにした。子どもたちの話し合いは、これらの頼宣の政策のうち、現在にまで残るものをレジェンド、農民への影響をNOレジェンドととらえる立場を中心に進んでいく。頼宣が藩をまとめたといったプロセスとできあがった秩序について、レジェンドか否かという問いを通して探究されていると言えよう。このことはまた、子どもたちには自己の立場性を明確にさせる機能も果たしている。後述する内生的秩序についての考察と合わせ、社会を考察する際の自己のパースペクティブに気づかせることは、子どもたちに自己のパースペクティブの限界に気づかせ、だから

こそ多様な他者と公共圏をつくっていく必要があることにも気づかせよう。

しかし、授業の前半の話し合いで探究されているのは、権威主義的で階層的な組織における指令的な秩序である、外在的な秩序である。システム内部から成長してきた内生的な秩序¹³⁾についての探究なしには、自己言及性のある学習にはならないだろう。ある時代の人間、社会集団の日常的な行為や意識を視点に、それがその時代の社会システムの生成にどのように関わっているのかを探究していくことを通し、社会の一員としての自己の行為や意識を反省的に振りかえることが、学習への自己言及性と、社会の一員としての自覚につながりうる。それでは、このような内生的秩序を探究していく授業の具体がどのようなものでありうるのか、章を改めて検討していく。

3. 社会システムを考える授業における父母状の教材としての可能性

本章では、内生的秩序を探究する授業の具体について、授業の発話記録(次ページ表2。一部抜粋)をもとに検討していく。

(1)内生的秩序を考える教材としての父母状

授業後半では、初代紀州藩主徳川頼宣が出した「父母状」について、「農民のお触れ書きに似ているのか？」をめぐって話し合いが行われる。

父母への孝行とともに、法度を守り、おごらずに家職に勤めることを説いた父母状は、寄合や宗門改めの際のみならず、のちには寺子屋でも教材として広く用いられるなど、特に和歌山を中心とした紀州北部で広く浸透していた。戦国の遺風冷めやらぬ紀州で、自力救済を否定し法度を守ること、また、下剋上を否定し家職に勤めることを説いた父母状のインパクトは大きなものであっただろう。庶民が守るべき心得を説いた父母状について考えることで、近世の秩序がどのように内側からつくられていったのかを考察することができる。

本授業では、百姓の行動規範を説いた「農民のお触れ書き」と似ているのかという問いを立て、父母状がどのように受け入れられたのかをロールプレイを通して考えさせていく。行動規範である触れ書きを内面の道徳を説いた父母状と比較することで、父母状の意味に気づくとともに、私たちがもつ規範(価値判断)とそれに基づくルールが社会秩序をかたちづくることに気づかせることで、自己言及性のある探究となりえよう。

(2)自他の考えの吟味の必要性

それでは、実際の授業ではどのような話し合いが行われたのか。

父母状について、みんなで話し合う場面では、Aと

Bの2人の子どもが、対照的な意見を述べる。Aは、「父母状って(中略)人を抑えつけるための法律みたいなもん」(C28)と発言し、父母状を外在的な秩序形成のための法令と捉え、その意味で百姓のお触れ書きと似ていると主張する。一方、Bは「紀州って治めるのがすごい難しい国やった。それをしっかり、李梅溪と頼宣がまとめたのがすごい。(中略)人と教育が大切」(C26)、「父母状って、そんな農民とかを縛り付けるために作ったわけちゃうんよ」(C54)と、「縛り付ける決まり(外在的秩序)ではなくて、教育(内から秩序をつくる、内生的秩序のためのしかけ)だ」ということを一貫して主張する。父母状が社会秩序の生成にどのように関わったのか、対立する2つの仮説が提示されているが、授業のまとめの発言では、「農民は父母状はめんどくさいとか縛り付けられていると思ったかもしれやんけど、頼宣とか李梅溪とかはそんな縛っているつもりはなかった」(C49)、「農民のなかでも、(中略)父母状をいいと思う人もおるし、悪いと思う人もおる」(C55)、「いろんな立場から見たときに、父母状は縛り付けられてるっていうように見えたり、そんなつもりはないように見えたり、そういうふうに変まっている」(C56)といった発言が相次ぐ。これらの発言は、A・Bの意見をもとに、父母状という事象について、支配者と百姓という2つの立場では見方が異なること、百姓という1つの身分であってもそのなかに多様な見解がありうること、政策は意図せざる結果を招きうることなどについての気づきと言えよう。しかし、これらのまとめの発言は、AとB、2人の意見を折衷したものであり、それぞれの意見を丁寧に検討した結果ではない。節を改め、この点を考えてみたい。

(3)議論における教師の指導性

表2に示した発話記録のなかで教師は、「父母状のこと何人か言ってたから、父母状のことしっかり考えたいな一と思う。先生ここがわからんので、みんな一緒に考えようか」(C27の発言中)と発言し父母状に焦点化したり、父母状についての劇(ロールプレイング)の役割を決める場面では、T38「他にない?」、T39「他のところを4つめのグループで分かれましょう」と発言し、父母状についてより多くの立場から考えることができるよう手だてを打ったりしている。教師が適切に話し合いに介入し、子どもたちの議論を方向づけていると言えよう。

しかし、時間の制約もあり、父母状が(後世につけられたその名称もあって、)父母に対する孝行を説くものという一面的な理解から深めることができなかった。ロールプレイの際に再度資料に立ち返り、父母状のそれぞれの文言が百姓や町人にどのような影響を及ぼしたのか、特に、家の仕事(家職)とは何かを考えるとともに、父母状がどのように普及したのか、特に、江戸

表2 当日の発話記録（一部抜粋）（ ）内のA～Cは児童、Sはつぶやき

【父母状について、みんなで話し合う場面】

C26(B) えーつとね、まず、ぼくは父母状のことでレジェンドって思うことがあって、その理由は、分厚い先生の資料でさ、熊野の事件あったやん？(S あー) で、それ聞いて父母状できたって言うたやん。で、それから頼宣と李梅溪は反省して、その父母状？一回読んでみる。「父母に孝行に」って書いてるから、親孝行して、「法度を守り、へりくだりて、おごらず」ってことは、「質素にして、家の仕事を務めて、正直に暮らすことは、みんなだれでも知っているけど、つねづねにこのことを教えさときさなければならぬ」って書いてんのよ。で、この教えを紀州全体に教えるために、寺子屋とか、あそこやったらこの父母状が基本、手本みたいになってて、福田先生言ってたやん。あのさ、紀州は、おっきなまとめてる人はおらんくて、自由やったやんって言うたやん？ で、そんなんも残ってて、紀伊って治めるのがすごい難しい国やったんよ。(S うん)。それをしっかり二人で抑えて、まとめたからレジェンド。(T 二人って誰？) 李梅溪と頼宣がまとめたから、すごいと思った。あと、教育。これ(父母状)は教育やん。で、頼宣は李梅溪を選んだんよ。すごい人やっていうので。だから、人と教育が大切やと思う。

C27(C) Bに対してで、これ見てください。(T 先生、じつはみんな父母状のこと何人か言ってたから、父母状のことしっかり考えたいなと思う。) いいですか。さっき、Bが説明してくれたことが表になっています。ほんで、ぼくは、父母に孝行のこととか、下のほうのことが(T 下っていうのは、)(S 法度を守り、とかから。T ここから？) そこから。それは、江戸時代、百姓へ出てたお触書に似てるんよ。(T ほんま？) 資料集見たり、ここ(モニター)見てくれたりしたらいいわ。(T 資料集は何ページか教えてあげて。S 65ページ。S このお触書って、法度とおなじようなもん？) えーと、この、幕府の法令を怠ったり、地頭や代官のことを考えず、粗末な…何て読むんや(T 資料集で言ったほうがわかりやすいんちゃう。S 似てるか？ T 先生ここがわからんのでみんな一緒に考えよか。) みんな、開いてる？ 朝は早く起きて草を刈り、昼は田畑を耕し、夜は縄をなったり、俵を編んだりして、気を抜かずに仕事すること。ほんで、さっき言ってた、この、「家の仕事を務め」ってここなんか似てない？(S ん？) だから、この、(S そっちの意味の似てる、やったん？おれ、別の意味の似てるやとおもってた)。じゃあ、僕の思ってること言わせて。いろんな仕事を、百姓さんはしてくださってことやん？ほんで、こっち(父母状)も、「家の仕事を務め」家の仕事をしっかりしてくださって書いてるやん。(S うん) 同じじゃない？(S えー、S うーん、S いっしょかなあ)

C28(A) おれがもっと違う「似てる」を言ってあげる(T 簡単に説明してくれる？) おれは、似てるのやり方がちがうとおもってて、父母状ってさ、南龍大神と同じように、人を抑えつけるための法律みたいなもんやん、ちゃう？上から下を守ったり、上の人にはむかってはいけませんよっていうことは、一揆をおこしたらだめですよってこと？あと、農民のお触書も、農民を上の人が抑えつける目的やろ？だから、父母状と、農民のお触書は目的が似てると思う。中身は似てないけど。(S えー、でも。S 対して)で、その、父母状っていうのは、確かに最初の父母に孝行せよっていうのは大事やと思うけど、結局農民へのお触

書をだしてるようなのと同じやから、それも人を抑えつけようとする一つ的手段やから、NOレジェンド。

T30 (途中で指名した子に発言を促す)

C29 父母状のことなんやけど、僕。雄湊幼稚園やったんよ。そのときに、さいごの卒園式みたいなときに、父母状読んで、(T へー) そんなとき、思ったんやけど、最初はよーわからんの覚えさせて読まされてるっておもってたけど、でも、今、この授業の中で父母状の意味が分かったら、父親とか母親を大切にしなければいけないってわかるし、それも一つの教育ちゃうかってあったから、僕はそその案を推すっていうか、大人でもそういう教育があったんやと思います。

C30(B) Cが、今その、お触書と父母状似てるっていったやん。で、「家の仕事を務め」って言うてるけど、これは、C目線から言ったら農民やん？(S うん) Aも、下の人ら目線で言ったやん。でも、もっといろんな人おんのよ。だから、いろんな人の立場で。だから、ぼくらこれから劇するやん。で、その劇の練習も兼ねて、みんなで一回してみたらいいと思います。

(中略)

【父母状についての劇の役割を決める場面】

T35 じゃあ、誰と誰と誰？

(S 頼宣、S 李梅溪、S 農民、S どうしょっかな、S 息子)

T36 農民の息子？

(S え？、S 農民と農民の子どもやから立場が低い人やで、S 父母状やから……)

T37 ほんなら農民のこどもでええか？

(S うーん)

T38 ほかにない？

(S 町人とか、S 家来とか)

T39 ここ(頼宣)とここ(李梅溪)とここ(農民)はこのままにして、ほかのところを4つ目のグループで分かれましょう。(それぞれのグループで考えましょう、の意)

【全体的話し合い：授業のまとめ】

T45 途中でけど、最後ちょっと意見ください。

C49 農民とかは、父母状はめんどくさいとかしばりつけられてるとか思ったかもしれやんけど頼宣とか李梅溪とかは、そんな、しばってるつもりはなかった。

C50 一緒に、農民は、縛り付けられてると思ってたけど、頼宣とかは、そんなことやと思ってなかった。

(中略)

C52 はい。農民の中でも、まあ、父母状に、お父さんとかお母さんとかに感謝しやなあかんと思う人もおれば、なんなよこの縛ったような感じはと思う人もおるから(T 農民のなかにも、みんな縛りつけられてると思ってるばかりじゃないってこと)

C53 つけたしで、多分なんやけど、多分、父母状は農民とかのひとに縛り付けられていて、めんどくさそう。

C54(B) そもそも父母状ってそんな農民とかを縛り付けるために作ったわけちゃうんよ。だから、そんなルールっていうかみんな思ってるほどきつくないと思う。そもそも。

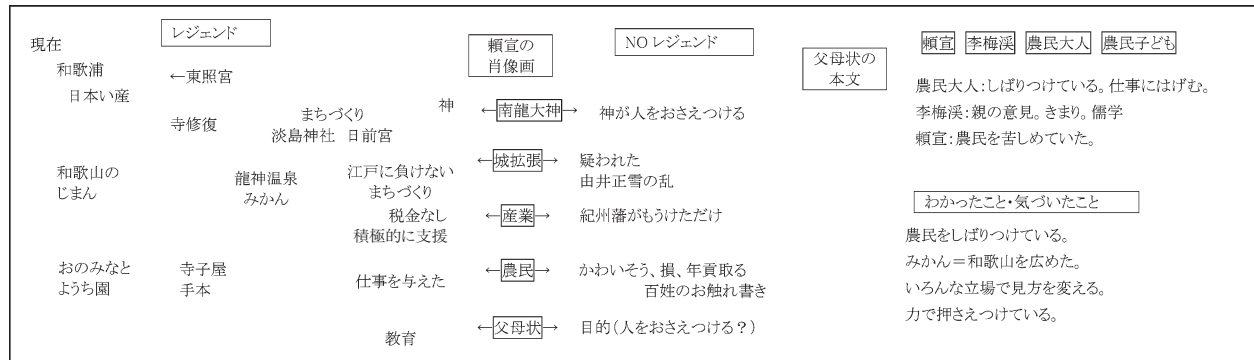


図2 板書の概要

時代に寺子屋がどのように普及したのか、師匠はどのような人が務めたのかなどを検討する必要がある。

4. おわりに

本稿では、附属小学校の授業を事例に、時代の社会システムを探る社会科授業がどのようなものでありうるのかを示した。事例として示した授業では、江戸時代の紀州藩での個々の具体的な政策を手がかりに、その時代の社会システムに迫る授業が展開されていた。図2の板書のいちばん左側に示された、日本遺産である和歌浦、みかんや龍神温泉などの和歌山のじまん、李梅溪のお墓がある海善寺の境内にある雄湊幼稚園などは、子どもたちが日常的に目にしているものである。本授業は、これらの現代に残る、しかも一見ばらばらの事象を探っていくことで、江戸時代の社会システムに迫る学習が展開されうることを示している。

注

- 1) 池野範男「市民社会科の構造」社会認識教育学会『社会科教育のニュー・パースペクティブー変革と提案』明治図書、2003
- 2) 原田智仁『世界史教育内容開発研究』風間書房、2000
- 3) ジークムント バウマン『リキッド・モダニティー液状化する社会』大月書店、2001

- 4) ウルリヒ ベック『危険社会ー新しい近代への道』法政大学出版局、1998
- 5) 渡部竜也「社会問題提起力育成をめざした社会科授業の構想ー米国急進派教育論の批判的検討を通して」全国社会科教育学会『社会科研究』第69号、pp.1-10、2008
- 6) 梅津正美「規範反省能力の育成をめざす社会科歴史授業開発ー小单元『形成される「日本国民」：近代都市の規範と大衆社会』の場合ー」全国社会科教育学会『社会科研究』第73号、pp.1-10、2010
- 7) 池野範男「市民社会科歴史教育の授業構成」全国社会科教育学会『社会科研究』第64号、pp.51-60、2006
- 8) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』2017、p.6
- 9) 渡部竜也「法原理批判学習ー法を基盤にした社会科の改革ー」全国社会科教育学会『社会科研究』第56号 pp.41-50、2002、溝口和宏「新しい社会知にもとづく社会科授業開発の基礎基本」社会認識教育学会『社会認識教育の構造改革ーニュー・パースペクティブにもとづく授業開発ー』明治図書、2006
- 10) 佐貫浩「主体的参加のための公共圏を立ち上げるーコミュニケーション論の視点からー」『教育』2005年11月号、pp.12-21、2005
- 11) 拙稿「社会科授業における「主体的・対話的で深い学び」とメディア活用ー小学校6年生の歴史授業分析を手がかりにー」『和歌山大学教育学部紀要』、2017
- 12) 濱田康三郎『父母状の話』紀伊郷土社、1942
- 13) 坂井素思『産業社会と消費社会の現代ー貨幣経済と不確実な社会変動』放送大学教育振興会、2003